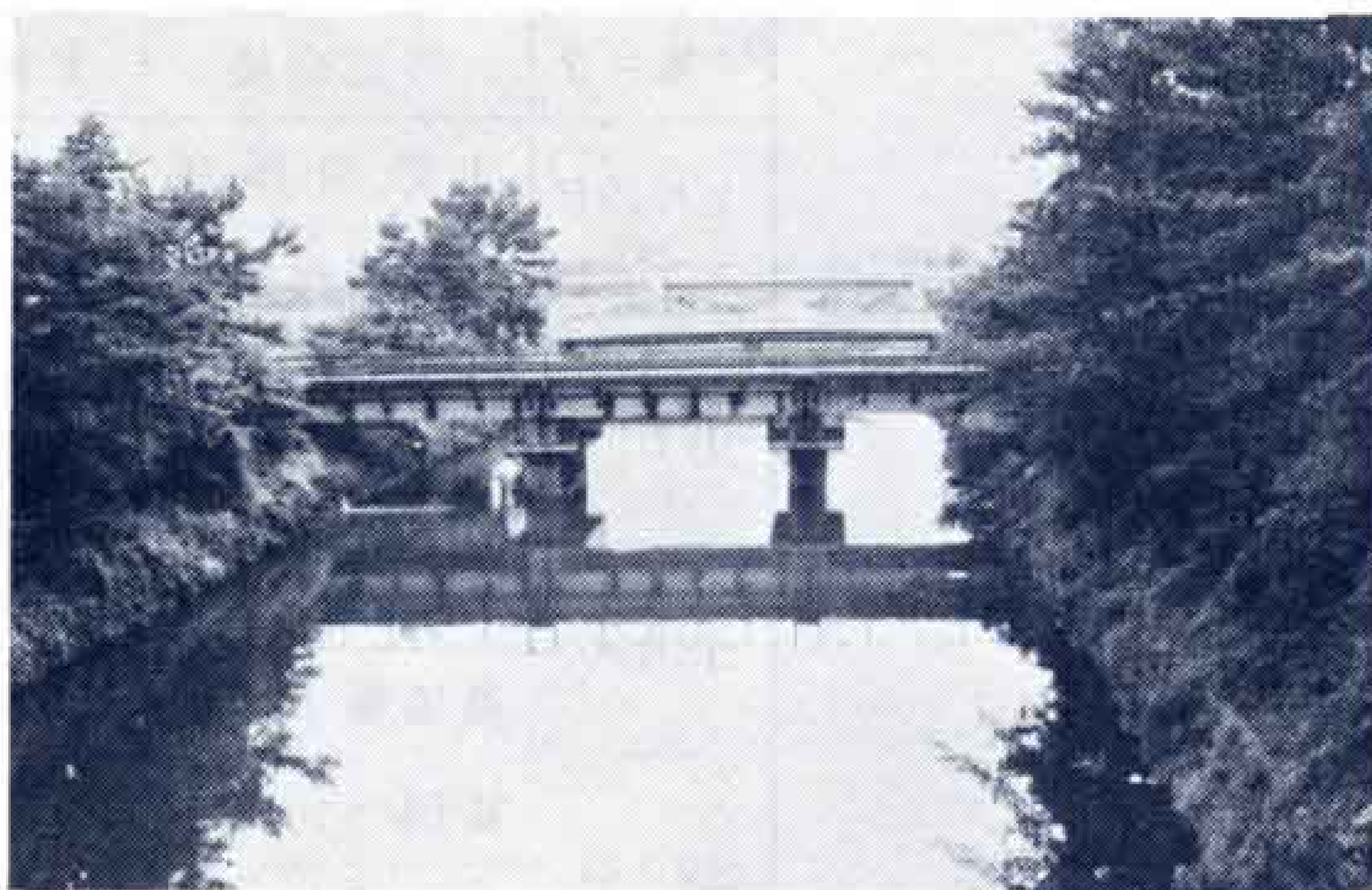


ふるさとの昔話

農業への努力

その2



〔国道一号線から見た昭和放水路〕

浮島沼の開発

昭和放水路

昔、浮島沼は、全国でも有数の湿地帯として知られていました。

大雨や台風たびに、沼は大きな湖のようになってしまいました。

今から約150年ほど前、原の増田平四郎は、この浮島沼を開発するため放水路を造ることを考えました。

放水路を造り、沼の水を直接海へ流すことによって、田を広げ、水害からも田を守ろうとしたのです。

しかし、平四郎の考えは村人から反対され、協力してもらえませんでした。葦山の代官所へも何回となく訴え続けました。

そして、初めて訴えを出してから20年後の1866年に、ようやく代官所から許可をもらい、工事を始めました。2年半後に放水路は完成。

しかし、その年の高波によって、あとかたもなく、こわされてしまい

ました。その後、再び直すことはできませんでした。

それから、68年たった昭和12年、同じ場所に放水路が造られることになったのです。それが現在の昭和放水路です。



川尻町 久松 清さん (63歳)

この辺の田んぼは、昭和放水路ができる前は、大雨になると愛鷹山からの水と、海からの海水で、どろ沼となっていました。

舟に乗って、稲かりをしたこともあるよ。

工業団地の裏に「水門めがね」があり、海水を防ぐことと、排水の役目をしたんだ。放水路のおかげで、水はけがよくなった…。

市立博物館 展示物紹介



市内の彫刻家板倉聖堂氏制作

役行者像

役行者は、7～8世紀のころ、大和の葛城山にいたまじない師で、役小角とも役のうばそくとも呼ばれた。

平安時代になって密教が山岳信仰と結びつくと、ますます修験道が盛んになり、彼は山岳信仰の理想的祖師として仰がれるようになった。



三極売上げ帳

三極は、和紙の重要な原料です。明治維新後、特に三極栽培が奨励され、富士・愛鷹山麓は大量生産地となりました。

このことが手漉を発達させ、ひいては工場制機械抄き和紙を盛んにする要因となりました。



表紙のことは

水防団による水防訓練と団員表彰式が、7月26日、滝川左岸の新幹線交差点で行われました。

訓練に参加した400人余の団員は、土のう工法、川くらづくり、蛇かごづくり、畳ばりの水防4工法を本番さながらに実施。水防技術の習得と規律の向上に大きな成果をあげました。

市内には、水防団が8分団(507人)あり、市民を水害から守るために備えています。